

蓼科ガーデンを通して恵泉の園芸に思う

小澤 文子(恵泉園芸センター・蓼科ガーデン)

1. 顧問森山さんのお話から

私が蓼科ガーデンに携わって8年目の今年、恵泉園芸センターの体制が変わろうとしている。もともと蓼科ガーデンは、恵泉女学園収益事業部である恵泉園芸センターの研修施設であった。そしてこの恵泉園芸センターは、園芸科の財政を援助するという目的で、昭和29年に卒業生によって創られたものである。これまでの50年間で11億円もの助成金が園芸科に寄与されたという事実をどれくらいの方がご存知であろうか。

短期大学としての園芸科が廃止になってこの数年間、園芸センターの役目も終わったのではないか、という思いに悩まれた方もいらっしやった。多くの話し合いが持たれた結果、恵泉園芸センターは今年の4月からは「学園の園芸教育と園芸文化発展への貢献」を主なる目的として新にスタートすることとなった。これを機に蓼科ガーデンの今後を見据える上でも、園芸センターの顧問でおられる森山さんのお話を改めて伺う機会が与えられた。限られた時間の中でセンターの50年の歩みをお話くださった。そこには数時間では言い尽くせないであろう歴史と園芸科への思いとが込められ、近年の経過しか知らない30歳代の私達にも目頭を熱くさせる思いが伝わるのだった。森山さんをはじめ、過去に100人近い多くの卒業生の方々が園芸センターに携わり、園芸科を守るためにあらゆる事に挑戦してこられたことを、色々なエピソードを交えてお話くださった。中でも印象的だったのは、当時若い女性が花を売っていると、酔っ払ったおじさんたちが寄ってきて、ねえちゃん扱いをしてくる。それに耐えられず、ある時森山さん

は当時の学園長、清水二郎先生に「花屋のねえちゃんなんか、したくありません。」とうったえる。すると清水先生は「花屋のねえちゃんの何処が悪い」とおっしゃられたと言う。

その一言に、譲れないものに対しては動じない志と気高さが感じられた。そしてこの精神の上では職業ではなく人として敬意をはらう姿が伺え、私達現場で園芸に携わる者達の気持ちを強くしてくれるのだった。それと同時に、どんなに苦しい時代も恵泉が貫いてきた園芸への姿勢は、これからも絶やしてはいけないのだという思いを一卒業生として強く感じるのであった。

2. 恵泉園芸センターのコンセプト

「よいフラワーアレンジメントは、深く自然を知らなければならない。自然こそ永遠の教師であり、インスピレーションの源である。」と、自然と人間の共存を説き、山口先生、森山さん、そして今は亡き百瀬さんと園芸科の卒業生の方々を中心に蓼科ガーデンは造られたと聞いている。最近でも、この蓼科ガーデンは何のための施設なのかという質問は少なくない。

以前森山さんから園芸センターと蓼科ガーデンの構想を伺ったことがある。最終的には、人々に「生活の豊かさとは」という、うったえかけにつながるこの話が私の心に響き、今まで蓼科ガーデンに携わってきた私の原動力となっているといっても過言ではない。私なりに解釈した構想は以下のようになる。

「蓼科ガーデンはもともと恵泉園芸センター、フラワースクールの研修施設として今から20年前に造られた。フラワーアレンジメントの教室で使われる花々は、ほとんどが市場から仕入れられるものである。しかしこの市場に出荷される花というのは、まっすぐでなければならない、長ければ長いほど価値が高まる、しっかりとし、規格が揃っている、というものである。このような花はある意味つくられた人工的なものといってもいい。自然に咲く花たち、ガーデンに咲く花たちは決してそうではない。むしろ太陽の光を求めて曲がっていたり、風にそよぐ姿や繊細さがそこにある。

ガーデンで、本来植物が地に根を下ろして咲いている姿を見、知った上で挿すアレンジには、また違った趣が与えられるのではないか。そのような観察、発見の場として、ガーデンの役割がある。また、最終的に目指していたフラスコスタイルの精神はそこでとどまらなかった。買って来た花ではなく小さくても自分の庭で、またそれがたとえベランダ園芸だとしても、自分の手で(自ら額に汗して)育てた花を、それが曲がっていようと一輪だけであろうと、家庭の食卓に上手に生けることが出来たら、それが生活の豊かさや向上につながるのではないか。」

このような志を持ち、1万㎡ものガーデンを備えた花屋は他にいくつあるだろうか。この点においても園芸センターと蓼科ガーデンは相互関係にあるがゆえに価値が高まるものだとも考える。

3. 蓼科ガーデンのコンセプト

敷地面積 3200 坪、標高 1150 メートルの蓼科の高原に位置するガーデンは、ボーダーガーデン、ハーブガーデン、バラ園、ロックガーデン、樹木園など、テーマごとに分けられたタイプのイングリッシュガーデンとなっている。近年全国にイングリッシュガーデンといった洋風のガーデンが造られ続け公開されている中、なぜこのガーデンは美しいのかと見学者から聞かれることも少なくない。私が思うのは、一つはこのガーデンの骨格でもある洗練された設計、もう一つは植物が人間に合わせているのではなく、人間が植物に合わせているということである。蓼科ガーデンにおいてすべての主役は植物であるからではないだろうか。ここではけっして新しい植物導入に力を入れているわけでも、最新式の道具が揃っているわけでもない。そこにあった植物を生かし、そこにあった道具を使う。ときには頂いた種から育てて苗を作ったり、近所の花仲間と苗を交換しながら少しずつ種類を増やすこともあるが、その季節その季節で必要なところに手を入れ、あとは自然の力に委ねるだけである。そして見学者に合わせて咲いた花を植えるのではなく、それらの植物が美しく生長するに合わせて人に見に来てもらうのである。これが私の管理する蓼科ガーデンの志である。

4. 私の考える恵泉の園芸

学生の時の2年間は、植物と触れあうことに心地よさを漠然と感じたものだった。その後恵泉で学んだ園芸は、園芸の知識だけではなく精神をも養われたのだと気がつく。飾らない本物の美しさを知り、美しいものを心から美しいと思える感性を培われ、育てることで生まれる愛着、植物をものではなく命あるものとして尊ぶ気持ち。そこから自分とは違う他者を尊重する気持ちにつながり、他者を受け入れることから自分自身をも見えてくる。園芸が人に与える影響はなんとなくよいものだとわかっている。しかし科学的にこれらを明確に証明できにくい分だけ、説得力に欠けるのだが、私の中ではそれが確信のようなものになっている。

良質なものをいかに大量生産するかといった、人間生活に必要なものの生産活動を追求する農学、新品種を求めた育種や栽培技術追求重視の一般的な園芸学。どちらも人間の価値観に合わせて植物が変えられているところに共通点がある。それらに加えて恵泉で学んだ園芸には、人間が植物(自然)そのものに目を向け、受け止めるものがあった。植物が人間の心にうったえかけ、人間がそれを感じ、人間が植物を通して変えられるという園芸だ。これは前者の自然に対し人間が能動的なものに比べて、後者は人間が受動的なところに違いがある。

園芸の本質は、目に見える利益以上に人の心や生活を豊かにしてくれるものだと思う。しかし園芸を商業に結びつけると、どうしても矛盾が生まれてしまう場合が多い。需要に合わせた技術や新しい植物の導入は、ある意味ブームに似た一時的なものであると思う。私達はこの一時的なものに振り回されるのではなく、園芸に対する変わらない信念を持って臨むべきであり、これが恵泉の継承されるべき園芸の心であると私は考える。